



TITLE:

2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔教育実践コラボレーション・センター〕採択：学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究--新しい学びと育ちの場でのとりくみを通じて--

AUTHOR(S):

西嶋, 雅樹; 桑原, 知子; 森田, 健一; 井上, 明美; 長谷川, 千紘; 宮嶋, 由布; 小西, 佳世; 菱田, 一仁; 永山, 智之; 中藤, 信哉

CITATION:

西嶋, 雅樹 ...[et al]. 2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔教育実践コラボレーション・センター〕採択：学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究--新しい学びと育ちの場でのとりくみを通じて--. 研究開発コロキウム：平成20年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2009: 36-37

ISSUE DATE:

2009-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143123>

RIGHT:

学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究

—新しい学びと育ちの場でのとりくみを通じて—

The Research of Clinical Psychological Approach
on Schools which Work on School Non-attendance

研究代表者	西嶋 雅樹 (D3)	教員	桑原 知子
研究分担者	森田 健一 (D2)	井上 明美 (D2)	長谷川千紘 (D1)
	宮嶋 由布 (D1)	小西 佳世 (M2)	菱田 一仁 (M2)
	永山 智之 (M2)	中藤 信哉 (M2)	

〔研究目的〕

我々のグループは、学校現場にスクールカウンセラーや相談員などの形で関わる大学院生を中心として構成されている。本コロキウムは、平成 19 年度に実施した 2 つの研究開発コロキウム『学校現場体験から見る心理臨床家の専門性』、『学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究』の流れを汲むものである。そのため我々は、昨年度に引き続き、学校現場における自らの専門性がどこにあるのかという点についての検討を重ねることをコロキウムの研究目的とした。

具体的には、大きく分けて以下の 2 点について体験的に学習を重ね、成果を得ることを目標とした。

- 1) 不登校児童・生徒への対応として独自の取り組みを行っている学校を訪問し、その実践例をもとに学校現場における心理臨床的関わりについての考察を深める。
- 2) 学校や職種を越えて意見交換のできるネットワーク作りを行う。

〔研究経過〕

コロキウムの実施を通じて、主に以下の 3 点の取り組みを行ってきた。

1) 現場体験報告会

参加メンバーがそれぞれの学外臨床研修先である学校現場で体験した内容を報告し合うという取り組みを、年間を通じて定期的の実施した。元々我々の領域の中核をなす研究法として「事例研究」という実践に根ざした手法がある。このコロキウムの中で行

ってきた現場体験報告に基づくディスカッションは、「事例研究」に類する取り組みであるといえる。

こうした取り組みを通じて、まず具体的に学校現場で問題となっている点についてメンバー間で知恵を出し合い、実践に還元するためのディスカッションが行われた。また、このような形で各々の体験の質を深めると共に、そこから新たに実践における問題意識が賦活されていった。

2) 北星学園余市高等学校訪問

2008年9月20日に、北星学園余市高等学校を訪問した。余市高等学校は中途退学者の受け入れを行った先駆的な存在であり、生徒との関わりに多大なるエネルギーを注いできた学校である。

我々が訪問を行った日は折しも学園祭初日であった。そのため、集団の持つ力を大切にして生徒を育てるという余市高校の実践の成果を間近に見る機会に恵まれた。また、民間が経営する寮の見学も行い、地域全体で生徒の育ちを見守る姿勢に接することができた。

3) 現場教員との意見交換会

2009年1月11日に京大会館にて、『学校現場をめぐる体験交流—お互いの工夫から学ぶ』と題して、京都市近郊の学校で活動する方々とコロキウムメンバーとの意見交換会を行った。この企画は、目的に挙げた「ネットワーク作り」の取り組みの一環として位置づけられよう。

現場では日頃それぞれの職員が多忙な中で子どもと関わっており、職種を越えての意見交換はなかなか綿密には行いがたいという実情がある。そんな中、この意見交換会を通じて、子どもと関わるということについて職種を越えてのディスカッションを行うことができた。参加者からは、有意義な議論ができたという感想が多く寄せられ、今後も継続的にこうした意見交換会の場を設けていきたいと考えている。

【研究成果】

まず、昨年度からの取り組みとして行っている学校訪問に関しては、個々の学校からの学びというだけではなく、それらを俯瞰的に言語化していく必要があるといえる。この点に関しては今年度の取り組みの中では十分になしえなかった。来年度以降の課題としたい。

ところで、研究経過の中で先述したいずれの取り組みも、個々の参加者が学校現場における体験を振り返り、深める機会となっていた。したがって本コロキアムの成果としては、多様な取り組みのいずれに関しても、それぞれのメンバーが学校現場での実践を行っていく上での「視点」が賦活されたという意義が大きかったといえよう。その意味で、開始当初から目標として掲げていた、体験的に学習を重ね、各々の体験を重視するという目標は達成できたと考えられる。

(文責：西嶋 雅樹)